
大往生

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大往生

【Nコード】

N5509G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

桃井朋英は仲間とどんな死に方が最高なのか話をしていた。その彼が迎えた最期とは。人間死に方はいいものでありたいものです。

第一章

大往生

どんな死に方がいいか。不意にそんな話になった。

気の合う仲間同士で鍋と酒を楽しみつつ。そんな話になっているのだった。

「どんな死に方がいいか？」

「どんななあ」

「ああ。どんなのがいい？」

その中の一人、桃井朋英が仲間達に対して問うのであった。問いながら鍋の豚肉を箸で取っている。

「死に方はな」

「そう言われてもなあ」

「どうしたものかな」

「死に方っていつでも色々だからな」

「まあいい死に方はあるよな」

自然と死に方自体の話になっていった。

「自殺はまあ。状況次第だけでれどうもな」

「ああ。それはやっぱりな」

それはここにいる誰もが引くものだった。

「嫌だよな、どうしようもないっていうかな」

「避けたいよな」

「そうか。自殺は駄目だよな」

朋英は皆の話を聞いて納得したように頷いた。

「自殺したら天国に行けないっていうしな」

「それキリスト教だったよな」

「俺達キリスト教徒じゃないけれどな」

死と宗教は切っても切れない関係にある。だから宗教の話に及ぶのも当然だった。

「まあそれでも。自殺っていうのはな」

「いいものじゃないよな」

こう結論付けられるのだった。とりあえず自殺は駄目ということになった。

そしてそのうえでであった。彼等はさらに話すのだった。

「事故死とかはあれだよな」

「死体がぐしゃぐしゃっていうのはな」

「嫌だよな」

事故死についても皆首を捻るのだった。

「死体がめちゃくちゃになってな」

「火事で黒焦げになっていたりあちこち食われたり切れていたりとかな」

「嫌だよな」

そんな話になるのだった。

「そういうのもな」

「御免被りたいよな」

「事故死も駄目か」

朋英は話を聞いてそれも駄目だということにしたのだった。

「それも」

「自殺だって首吊ったらえげつねえぜ？」

一旦自殺の話にもなった。

「電車にしろな。毒飲むのも相当苦しいやつが多いしな」

「まあどっちにしろ自殺は駄目だって」

あらためて自殺は否定された。皆の中で。

「それはやっぱり駄目だ」

「で、事故死もか」

「運とかも関係あるけれどな。それでも」

「それも嫌だよ」

また事故死が否定された。とにかく自殺と事故死は駄目ということになった。そして話はさらに進められるのだった。それと一緒

に食事と酒も進むのがおかしいといえはおかしい。

「何かいい死に方って考えてみれば」

「結構少ないか？」

「病気はどうだよ」

一番オーソドックスと考えられるものが出た。

「それはよ」

「病気か？」

「そう、それだよ」

「どうだ？」

「病気っていつでも色々だぜ」

その病気に対してさらに細かい話になるのだった。

「癌は辛いぜ」

「昔だったら梅毒とか結核とかえげつないだろ」

「ああ、ああいう病気って相当えげつなかったらしいな」

「今だとエボラか？」

話題の伝染病の話にもなった。

「ああした病気にかかって死ぬのはな。やっぱりな」

「勘弁して欲しいよな」

「苦しみ抜いて死ぬ病気はな」

「それはな。俺だってそうだしな」

朋英は皆の話を聞いてあらためて言った。

「そうした死に方はな。苦しまず、奇麗に死にたいよな」

「それで他人様に迷惑かけずにな」

「そういう死に方がいいよな」

そういう話になっていく。とにかく苦しまずに死体も奇麗であつてしかも誰にも迷惑はかけない、そういう死に方がいいのだと言うのだった。

「だからな。いい死に方っていうのはな」

「本当に少ないよな」

皆箸を止めて腕を組んで考える顔になったのだった。

「何があるんだ？ 本当に」

「いい死に方って」

「俺、死ぬのなら苦しまずに死にたいな」

朋英はここではじめて自分の考えを口にしてきた。

第二章

「あっさりとな」

「あっさりとかよ」

「ああ。苦しまずに一瞬でな」
「こうも言った。」

「死にたいもんだよ。自殺でなくてな」

「そうだなあ。そういう死に方ってな」

「何かあるか？」

「あるんじゃないのか？」

皆朋英の話を聞きつつそれぞれ話すのだった。

「探せばな。一つ位は」

「そりゃ人間生きてりゃ死ぬしな」

「それはな」

生きているからには絶対に死ぬ。これだけは確実だった。生があれば死があるのは絶対だ。だが問題はそれがどういったものか。今話されているのはそこであった。

「けれどもなあ。苦しまずにあっさりか」

「あるかね？そんなの」

「とにかくあったらそれでいい」

朋英はまた言う。

「それでな」

「まあよ。とりあえず死ぬ時にまでそれを見つけたらどうだい？」

「そうだな」

皆結論は出なかったがそれでも言い合うのだった。

「どうせ死ぬんならな」

「いい死に方をな」

「そうだな。まあ気長に考えるか」

朋英もまた腕を組んで考える顔になって述べた。

「その辺りはな」

そんな話をしたのが若き日だった。まだ大学に入りたてで前途洋々の歳だった。やがて歳を取り就職し結婚して子供ができて様々なことを経験し。気付いた時にはもう皺がれた老人になっていた。幸いその時まで健康で大きな病気も事故も何一つ経験してはいなかった。

そしてその歳になっても考えていたのだった。いい死に方とは何かを。

今は長年連れ添った女房や子供達だけでなく数多くの孫達にも囲まれている。曾孫達もいてそれかなり大きい。丁度正月で皆彼を囲んで新年を祝っているのであった。

「ねえお爺ちゃん」

「何じゃ？」

孫の一人の言葉に温和に応える。今はその皆でおせち料理を食べている。

「お爺ちゃん今幾つだったっけ」

「もう百歳じゃかな」

「もう百歳なんだ」 8

「そうなるのう」

とりあえず頭の中で自分の歳を数えてみる。まあそんなところだと思った。

「まさかここまで生きていられるとは思わなかった」

「凄いよな、百歳なんて」

「そうだよな。しかもこの歳になってもしっかりしているし」

「うん。歳を取っていればいいことも一杯あるぞ」

彼は穏やかな声で周りにいる子供や孫や曾孫達に対してまた述べた。

「こうして皆に囲まれるしのう」

「お年玉せびられても？」

「それでも？」

「そえはそれ、これはこれじゃ
こう言うのである。」

「よいものじゃよ」

「お金がなくなってもいいって」

「そんなものなんだ」

「そうじゃよ」

朋英は声をさらに穏やかなものにさせていた。

「充分のう」

「ううん、よくわからないや」

「俺も」

「私も」

孫達と曾孫達は今の彼の言葉には首を捻るだけであつた。

「そんなもんなの？」

「本当によくわからないけれど」

「まあそれもおいそれわかるうものじゃ」

今はこう言うだけの朋英だった。そのうえで長年連れ添った女房に顔を向ける。もうダイヤモンド婚まで経ているし付き合いはそれこそ親子以上である。

「のう婆さんや」

「ええ、確かに」

その女房も笑顔で答えるのだった。

「その通りですねえ、お爺さん」

「そういうものじゃよ」

そうしてまた周りの家族に声をかけるのだった。

第三章

「それはな」

「ううん、やっぱりよくわからないし」

「歳取ればわかるのかな？」

「わかるわかる」

朋英は自分で言った。

「それはな」

言いながら今度は子供達を見る。皆もう老人だ。

「御前達もわかったじゃろう」

「まあそうかな」

「この歳になってやっと」

「何となくだけれど」

「歳を取ってやっとわかることがある」

彼はまた言うのだった。

「そういうことがな。しかしじゃ」

「しかし？」

「何かあるの？」

「一つだけわからんことがあってのう」

腕を組みつつ言うのであった。ここで。

「一つな」

「それって何？」

「まだあるの？」

「こればかりはわからん」

皆に答えずにまた言うだけだった。

「まだな。百歳になっても」

「百歳になってもわからないって？」

「それって何なのかな」

「やっぱり私達にもわからないよ」

「当然わしにもわからん」

朋英も自分で言う。

「それはな」

「でさ、親父」

子供の一人が彼に問うてきた。髪の毛がもうなくなった老人である。

「それって何なんだよ」

「それか」

「そうだよ。まずそれを言わないとさ」

「ねえ」

「わからないよな」

子供達は顔を見合わせて言い合う。やはり皆もう老人である。男も女も。

「親父それが何か言わないし」

「そもそも」

「まあ今は内緒じゃよ」

これについては言おうとしなかった。

「今はな」

「何か煮え切らないよ、それって」

「ここまで来て言わないなんて」

「まあ少なくとも満足はしておるよ」

彼はこういっただけだった。

「生きておってな」

「まあそれはいいけれどね」

「満足しているんならね」

皆それはいいとした。それは。

「けれど。百歳か」

「本当にね。長生きだよね」

「めでたいめでたい」

またしても自分で言う朋英だった。

「とまあ今はじゃ」

「うん」

「楽しくやろうな」

穏やかな笑顔をまた見せての言葉であった。

「これからもな」

「わかってるよ。じゃあひいお爺ちゃん」

曾孫娘の一人の言葉だ。

「ずっとずっと長生きしてね」

「よしよし」

彼女の言葉に笑顔で頷く。こうして彼は百歳の正月を楽しく過ごした。それから数年後。

彼は遂に動けなくなった。老衰になろうとしていた。その横にはあの女房もいる。彼女もまた老衰であった。

「いや、二人並んでなんて」

「また変な縁ですよ」

「全くじゃ」

二人枕を並べて言い合っていた。

第四章

「確かに変わった縁じゃ」

「けれど。いい縁ですね」

女房はこう言ってきた。

「最後までって」

「そうじゃな」

女房の言葉に朋英は笑顔になった。

「最後までなんてな」

「結婚してからずっと」

ダイアモンド婚を遥かに過ぎてまだなのだった。

「だからですね」

「そうじゃ。最後までな」

「はい」

「そしてじゃ」

彼はさらに言ってきた。

「こうしてな」

「ええ」

「周りには皆いてくれる」

その子供達に孫達、曾孫達まで周りに集まってきていた。そうして朋英の、二人の最期を看取っているのだった。

「よいことじゃ」

「そうですね」

「ひい爺ちゃんとひい婆ちゃん死ぬの？」

曾孫娘の一人が泣きそうな顔になっていた。

「ひょっとして。もうこれで」

「泣くことはないぞ」

朋英はその曾孫娘に対して言うのだった。

「別にな」

「泣くことはないって」

「どうして？」

「わしはもう充分に生きた」

まずはこう言った。

「充分にな。それに」

「それに？」

「今こうして皆に囲まれて安心して死ぬことができる。それでどうして悲しいのじゃよ」

「けれど。ひい爺ちゃんもひい婆ちゃんも死ぬし」

「もう。二度と会えないし」

「会える会える」

その言葉にもにこにこ返す朋英だった。

「そんなの何時でも会えるぞ」

「何時でも？」

「そう、何時でもじゃ」

今度はこう言うのだった。

「何時でも会えるぞ。わしにはな」

「どうして？死ぬのに？」

「何でなの？」

「わしは御前達の心の中で生きるじゃろ」

穏やかな笑顔での言葉であった。

「心の中だな。記憶となってな」

「記憶となって」

「そうじゃ」

こう言うのである。

「ずっとな。生きておるからな」

「だから会えるというのね」

「そういうことじゃ」

彼が言うのはそういうことだった。

「ずっとな。じゃからな」

「生きているって言うの？」

「俺達の中で」

「左様。じゃから安心するのじゃ」

「生きているんだよ」

女房も言ってきた。周りにいる子供達や孫達、曾孫達に対して。

「だからね。安心して」

「ここにおってくれ」

「ここであいていいの？」

「お爺ちゃんとお婆ちゃんの場合に？」

「ここに」

「是非いてくれ」

彼はまた言った。

「ここにな」

「そう。それじゃあ」

「ここにいて」

「ずっと看取るからね」

「これでやっぱわかった」

今度は不意にこう言う朋英だった。

「やっぱな」

「やっぱって？」

「何が？」

「ずっと考えておったのじゃ」

そしてさらに言葉を続けてきた。

「ずっとな」

「ずっとって？」

「何が？」

「死に方じゃ」

このことを言ってきたのだった。

第五章

「死に方をな。ずっと考えておったのじゃよ」

「ずっと考えていたって死に方を？」

「何でそんなことを考えていたんだよ」

「死に方といっても色々あるじゃろ」

こう皆に返したのだった。

「生き方もあれば死に方もな」

「まあそう言えばそうだけれど」

「お父さんらしくないわね」

「わしらしくないか」

子供達はその言葉にはついつい笑ってしまったのだった。

「ははは、そうかもな」

「そうかもなって」

「自分で言ってみせたのだった」

「まあそう言うな。考えておったんじゃからな」

「まあそれはいいとして」

「そんなの考えていたんだ」

「うむ。そうじゃ」

自分で言ってみせたのだった。

「それが今わかったのじゃよ」

「わかったって？死に方が？」

「うむ。最高の死に方はこれじゃ」

また言う朋英だった。

「これなのじゃよ」

「つていうと今が？」

「そうなんだ」

「そうじゃよ。わしは今こうして死のうとしている」

このことはもう疑いようがなかった。最早それは何があっても避

けられない状況だった。

「それでわかったのじゃよ」

「最高の死に方が？」

「死ぬ時になって？」

「そうじゃ。皆に囲まれてのう」

床の中で至高の笑みになっていた。

「思う存分長生きして色々と楽しい思いをしたうえでな。それこそが最高の死に方じゃよ」

「そういうものなんだ」

「死に方も色々なんだ」

「そうなのじゃよ。さて」

また至福の笑みと共に述べた言葉だった。

「後はじゃ。皆で仲良くな」

「お父さんもね」

「お婆ちゃんと一緒に」

「ずっとね」

子供達も孫達も曾孫達も口々に朋英だけでなく彼の妻、皆にとつては母であり祖母であり曾祖母であるその彼女にも声をかけたのだった。

「楽しくやってね」

「あっちの世界でもね」

「人は絶対に死ぬ」

朋英はまた言ったのだった。

「けれど最高の死に方ができると」

「できると？」

「それだけで人生は最高のものになるのじゃよ」

これが彼の最後の言葉だった。そうして数日後彼は女房と共にその長く幸福な生涯を終えた。死んだ時の表情もこれまた実に満ち足りたものだったという。これこそまさに大往生と言うべきであろう。

大往生

完

2009・1・3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5509g/>

大往生

2010年10月8日15時04分発行